HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	臨床実習教育上の問題点のありかの検討
Author(s)	河野, 仁志; 村田, 和香; 真木, 誠; 八田, 達夫; 深澤, 孝克; 大宮司, 信; 丸谷, 隆明; 末永, 義圓; 上野, 武治
Citation	北海道大学医療技術短期大学部紀要, 6, 55-69
Issue Date	1993-12
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/37552
Type	bulletin (article)
File Information	6_55-70.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

臨床実習教育上の問題点のありかの検討

河野　仁志・村田　和香・真木　　誠・八田　達夫・深澤　孝克
大宮司　信・丸谷　隆明・末永　義圓・上野　武治

On What the Education of Clinical Practice for Students in Occupational Therapy should be

Hitoshi Kawano, Waka Murata, Makoto Maki, Yoshikatsu Fukazawa, Makoto Daiguji, Takaaki Marutani, Yoshimaru Suenaga and Takeji Ueno

Summary

The purpose of this study is to search problems of the education of clinical practice for occupational therapy students (OTS) who belonged to Department of Occupational Therapy, College of Medical Technology, Hokkaido University, and to inquire out for the means of solving these problems.

Therefore this time, we conducted a quetionaire survey in order to know above points. Subjects of this were OTSs who had finished the clinical practice for 1992 th and occupational therapists (OTR) who supervised those students.

As a result, it considered that the present clnical practices compelled these OTSs and OTRs into a heavy taxes and problems.

There had been institutionl problems and a short history of education of japanese occupational therapy into background. And there were heavy responsibility for solving these problems on what should be the education of clinical practice for students in occupatioal therapy, for our department and members.

要　　旨

本研究の目的は，作業療法教育における臨床実習教育の問題点をさぐり，その解決の方向について検討することにある。

そのため，1992年度の臨床実習に参加した本学科学生とその指導にあたった実習指導者とを対象にアンケートによる調査を実施した。

その結果，現行の臨床実習は，学生にも実習指導者にも種々の面で大きな負担を強いていることが明らかになった。これは，臨床実習の制度的問題や作業療法教育の歴史的な浅さを背景としているが，その解決には本学科の果たすべき責任も大きなものと考えられた。

I．はじめに

臨床実習は作業療法士の養成過程において量・質ともに非常に重要な意義と位置づけを

北海道大学医療技術短期大学部作業療法学科
Department of Occupational Therapy, College of Medical Technology, Hokkaido University.

持っている。当学科でも既に10期生が卒業し，臨床実習の経験が重ねられてきているが，同時に，その中で様々な問題が浮かび上がってきており，それも全国的に共通する問題も決して少なくない[1)2)3)]。

特に1992年度より，新カリキュラムへの移行に伴い，専門科目の授業数の増加と実習期間の大幅な減少，さらに本学科では実習期間を従来の1期あたり7～8週から6週に短縮し，3年次の4月より開始されるなど，臨床実習も大きな転換点に立たされている。

このような状況の変化もあり，現時点での臨床実習上の問題点を摘出・整理し，その改善の方策を検討することは，今後の作業療法教育の質的向上のためにも，作業療法の科学性と技術の向上のためにも極めて重要な課題である。

本研究はそのための第一歩として取り組まれたものである。

II．対象と方法

対象は1992年度の分野別3期にわたる臨床実習を終了した当学科3年次学生18名(男性5名，女性13名，臨床実習開始時の平均年齢21.3才)，ならびにこれら学生に対し実習指導者として実際に指導にあたった作業療法士32名である。方法は，前記学生に対しては臨床実習終了後の1993年2月，資料1に示す無記名のアンケート調査用紙（資料1）を学内で手渡し1週間以内に回収した。アンケートの内容は，臨床実習前後の状態，臨床実習過程における困難，臨床実習指導者との関係と要望，当学科への要望，そして自由意見の記載等より構成されるが，特に臨床実習過程に関わる困難とその解決方法に重点が置かれた。また実習指導者に対しては，同様の形式のアンケート調査用紙（資料2）を同時期に郵送し2週間以内に回収した。このアンケートの内容は，臨床実習指導者の基本的特徴，実習学生の問題点，指導上の困難，当学科への要望，自由意見の記載等より構成される。

III．結　　果

1．学生の調査結果

1）臨床実習の前後の状態（表1，2）

学生は臨床実習直前において臨床実習への不安（100.0%）と過緊張（72.2%）の状態の中，学友同士との会話(77.8%)，実習に関する情報収集（38.9%）等を行ないながら，勉強したり（33.3%），遊んでいた（38.9%）りして過ごしていたようであった。

終了後の臨床実習の成否に関する感想では，全体として否定的(50.0%)，もしくは判断不能とするもの（44.4%）が大部分を占めており，臨床実習が必ずしも順調な経過ではなかったことが自覚されていた。

2）臨床実習過程での困難，

臨床実習の核である実地勉強の過程では（表3），身体障害，精神障害，小児の分野を問わず，

表1　実習に行く直前の状態
（複数回答）　n＝18

項目	%
不安だった	100.0
同級生と話した	77.8
とても緊張していた	72.2
実習に関する情報を得た	38.9
遊んでいた	38.9
勉強をした	33.3
普段と変わらなかった	5.6
楽しみだった	5.6
その他	22.2

表2　実習を振り返ってみてどう思うか

	男性(人)	女性	計	計の%
なんとも言えない	1	7	8	44.4
1部うまくいき，1部駄目	3	3	6	33.3
3期とも駄目だった	0	3	3	16.7
3期ともうまくいった	1	0	1	5.6
計	5	13	18	100.0

表3　実習過程中，困難だった過程は何か（複数回答）

	総計 (n=54) %	1期 (n=18) %	身 (n=10)	小 (n=4)	精 (n=4)	2期 (n=18)	身 (n=9)	小 (n=2)	精 (n=7)	3期 (n=18)	身 (n=7)	小 (n=4)	精 (n=7)
検査と評価	59.3	66.7	70.0	75.0	50.0	61.1	66.7	100.0	42.9	50.0	57.1	100.0	14.3
問題点の把握	61.1	50.0	40.0	75.0	50.0	61.1	77.8	0.0	57.1	72.2	85.7	50.0	71.4
治療計画の作成	55.6	50.0	50.0	50.0	50.0	66.7	77.8	100.0	42.9	50.0	57.1	50.0	42.9
治療援助の実施	35.2	27.8	10.0	50.0	50.0	38.9	55.6	100.0	0.0	38.9	14.3	75.0	42.9
記録と報告	44.4	50.0	30.0	75.0	75.0	38.9	55.6	50.0	14.3	44.4	42.9	25.0	57.1
職業人としての適性	27.8	16.7	10.0	25.0	25.0	33.3	55.6	0.0	14.3	33.3	28.6	25.0	42.9
管理運営に関わること	11.1	11.1	0.0	25.0	25.0	11.1	22.2	0.0	0.0	11.1	14.3	0.0	14.3
実習セミナーの報告	33.3	30.0	30.0	25.0	50.0	38.9	66.7	0.0	14.3	27.8	28.6	25.0	28.6
実習以外のこと	13.0	5.6	10.0	0.0	0.0	16.7	33.3	0.0	0.0	16.7	0.0	25.0	28.6
その他	1.9	5.6	10.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

表4　不足していた知識分野（複数回答）

専門基礎科目		ＯＴ専門科目	
解剖学	77.8%	評価法	94.4%
運動学	72.2	身障ＯＴ	72.2
生理学	61.1	機能代償法	55.6
神経学	61.1	精神ＯＴ	50.0
精神医学	44.4	発達ＯＴ	50.0
整形外科学	38.9	技術学	44.4
リハ医学	33.3	ＯＴ概論	16.7
病理学	33.3	老年ＯＴ	16.7
小児科学	33.3	職能適性管理学	16.7
人間発達学	33.3		
一般臨床医学	27.8		
リハ概論	22.2		
内科学	16.7	一般教養	
臨床心理	11.1		
医学概論	11.1	心理学	16.7%
生体計測工学	5.6	英語	16.7
情報処理工学	5.6	生物学	5.6
		化学	5.6

また3期を通じて多少の変動はあったものの，検査と評価，問題点の把握，治療計画の作成，記録と報告での困難が目立っていた。

不足していた知識分野では(表4)，専門的基礎科目においては，解剖学(77.8%)，運動学(72.2%)，生理学と神経学(共に61.1%)，精神医学(44.4%)，整形外科学(38.9%)等が，作業療法専門科目においては評価法(94.4%)，身体障害作業療法(72.2%)，機能代償法(55.6%)，精神障害作業療法と発達障害作業療法(共に50.0%)，技術学(44.4%)等が大きな比重を占めていた。その一方，知識を補う勉強では(表5)，必死に勉強した(38.8%)が，少し勉強した(50.0%)よりは，少ない状態であったものの，実習への取り組みでは(表6)，複数回答ながら，一生懸命だった(61.1%)，無我夢中だっ

た（38.9%）と大部分が努力していたことを示していた。

実習中の困難としては(表7)，課題をこなすだけで精一杯（88.9%）を筆頭に，質問・発言の少なさ（72.2%），解決方法の不明（50.0%），提出物・報告書の期限内提出の難しさ(38.9%)，指導の理解の困難（33.3%）という学生主体に関わる諸困難，そして指導者や患者等との人間関係形成の諸困難（前者50.0%,後者33.3%），さらには適性への悩み（38.9%）などであった。なお，6週間の実習期間が短かった（38.9%）という意見も注目される。

困難の解決方法としては(表8)，同級生に相談した（66.7%）り，他の実習生に助けて貰ったり（55.6%）という類似状況にある人の力を借りての解決が最も多く，次いで本や雑誌を参考にした（50.0%），自分だけで努力した（33.3%)という自身による解決，実習指導者のアドバイスと当学科教官への相談（共に44.4%）による解決，そして流れに身をまかせたと泣いた（共に44.4%），ストレス解消に努めた（33.3%）と続いていた。

3）実習指導者に対して

指導者に対する思い（表9）では，仕事に忙しい姿を見ながら（33.3%），優しかった（77.8%)，尊敬出来た(44.4%)，立派な人だった(44.

表5　知識を補う勉強をどの程度したか

少し勉強した	9人	50.0%
必死に勉強した	7	38.8
何もしなかった	0	00.0
無回答	2	11.2
計	18	100.0

表6　実習への取り組み姿勢は（複数回答）　$n=18$

一生懸命だった	11人	61.1%
無我夢中だった	7	38.9
いい加減だった	3	16.7
わからない	1	5.6

表7　実習中の困難点（複数回答）　$n=18$

課題をこなすだけで精一杯で，余裕がなかった	88.9%
質問・発言が少なかった	72.2
指導者との人間関係をうまく作れなかった	50.0
わからないことをどう解決したらいいかわからなかった	50.0
提出物，報告書等の期限を守れなかった	38.9
作業療法士になる適性に悩んだ	38.9
実習期間が6週間は，短かった	38.9
患者等の対象者との人間関係をうまく作れなかった	33.3
指導者による指導を理解すること	33.3
個人的な問題で，実習に身が入らなかった	16.7
マナーなどの一般常識を知らず，苦労した	11.1
その他	5.6

表8　困難の解決方法は（複数回答）　$n=18$

同級生に相談した	66.7%
他の実習生に助けてもらった	55.6
本や雑誌を参考にした	50.0
実習指導者のアドバイスに依った	44.4
短大の教官に相談した	44.4
流れに身をまかせた	44.4
泣いた	44.4
自分だけで努力した	33.3
ストレス解消に努めた	33.3
その他	11.1

表9　指導者をどうおもいましたか（複数回答）　$n=18$

優しかった	77.8%
近寄り難かった	66.7
尊敬できる人だった	44.4
立派な方だった	44.4
厳しかった	38.9
話しやすかった	38.9
仕事が忙しそうだった	33.3
恐ろしかった	22.2
その他	5.6

表10　指導者への要望は　（複数回答）　$n=18$

話しやすい雰囲気を作って欲しかった	50.0%
指導者の体験などを聞きたかった	38.9
懇切丁寧に指導して欲しかった	33.3
指導内容が理解できるようにして欲しかった	27.8
実習の日程などの計画を明示して欲しかった	22.2
症例数を多くして欲しかった	11.1
特になし	11.1
ビシビシ指導して欲しかった	5.6
課題を減らして欲しかった	5.6
指導の時間を多くして欲しかった	0.0
指導者の経歴や人柄を事前に知りたかった	0.0
その他	22.2
無回答	5.6

表11　実習の到達目標について　$n=18$

わからなかった	72.2%
明確でなかった	16.7
明確だった	11.1
計	100.0

4%），話やすかった（38.9%）という肯定的な指導者像と，近寄り難かった(66.7%)，厳しかった（38.9%），恐ろしかった（22.2%）という否定的なそれの二つにわかれており，矛盾した結果となっている。

指導者への要望では(表10)，話易い雰囲気を作って欲しかった(50.0%)，指導者の体験等を聞きたかった（38.9%），懇切丁寧な指導（33.3%）という指導のあり方に関わる点が多く，指導内容の理解（27.8%），実習計画の明示（22.2%）等の実習自体に関わるものは比較的少なかった。

表12　教官の訪問について（複数回答）$n=18$

嬉しかった	83.3%
嫌だった，恥かしかった	16.7
もっと多く訪問して欲しかった	11.1
分野に属した教官にきて欲しい	11.1
必要なかった	5.6
その他	16.7

表13　実習前に期待すること（複数回答）$n=18$

評価などの復習をして欲しかった	83.3%
心がまえの期間が欲しかった	33.3
もっと実習向けの授業を充実して	11.1
特に期待することは無かった	11.1

表14　実習終了後の変化は（複数回答）$n=18$

もっと勉強したいと思った	61.1%
知識が増えた	50.0
人間的に成長した	44.4
自信を無くした	33.3
自信がついた	16.7
作業療法がわかってきた	16.7
ＯＴ辞めたくなった	11.1
他の道考えるようになった	5.6
仕事の厳しさがわかった	5.6
成長が感じられない	5.6
自分を見つめることができた	5.6
ＯＴに懸ける気になった	5.6
変化無かった	0.0

4）当学科に対して

実習での到達目標については(表11)，わからなかった（72.2%），明確でなかった（16.7%）とするものが大部分を占めていたことが注目される。

教官の実習訪問については(表12)，嬉しかっ

た（83.3%），嫌だった・恥ずかしかった（16.7%）であった。

実習前に期待することでは(表13)，評価技術等の復習（83.3%）が大部分を占め，次いで，心構えの期間（33.3%）を要望するものとなっていた。

5）実習後の自分について（表14）

33.3%が自信を無くしたと回答しているが，知識が増えた(50.0%)，人間的に成長した(44.4%)，自信がついた(16.7%)，作業療法が分かってきた（16.7%）という肯定的な回答が上位を占め，今後に関しても，もっと勉強したい(61.1%）と積極的な態度が目立っていた。

2．実習指導者の調査結果

1）実習指導者の基本的特徴

性別・年齢構成をみると，男性では16名中，25－30才が75%を占め，女性では16名中，25－30と31－40才が同率で合わせて75%を占めていた。

作業療法の臨床経験年数では，4－6年が34.4%，7－10年が37.5%であり，実習指導経験年数では，1－3年が40.6%，4－6年が28.1%，7－10年が25.0%であり，大半が年齢・臨床経験共に若いことが大きな特徴であった。また，施設の大部分が臨床実習に協力的であった（84.4%）。

2）実習学生の問題点

実習指導者からみた学生の問題点(表15)は，上位の項目から，質問・発言の少なさ(78.1%)，与えた課題以外はしない(53.1%)，提出物の期限を守らない(50.0%)，基本的知識の不足(46.9%)，熱意の少なさ(31.3%)，スタッフとの人間関係のまずさ（31.3%），マナーの不足（28.1%），対象者との関係作りの未熟さ（25.0%），指導内容の理解不足(25.0%)，時間のムダ使いとつかみどころが無かったが共に21.9%，適性への疑問（18.8%）等となっており，学生の抱えていた困難点と多くの共通点が見られた。

それら問題点への解決手段は(表16)，学生とのやんわりとした話合い（71.9%）とスタッフ全体の討議（62.5%）が最も多く，続いて一人での指導（37.5%），当学科への連絡・相談（31.3%），学生本人の成長を待つ(31.3%)，厳しく

表15　実習学生に観られた問題点（複数回答）　$n=32$

質問・発言が少なかった	78.1%
与えた課題以外，しようとはしなかった	53.1
提出物・報告書等の期限を守らなかった	50.0
作業療法の基本的知識が不足していた	46.9
実習に熱意が感じられなかった	31.3
スタッフとの人間関係をうまく作れていなかった	31.3
一般常識的なマナーに欠けていた	28.1
患者・対象者との人間関係をうまく作れていなかった	25.0
指導したことをよく理解していなかった	25.0
時間を無駄に過ごしていた	21.9
つかみどころが無かった	21.9
作業療法士に成るには，本人の適性に疑問を感じた	18.8
場に即応した言動が観られなかった，	18.8
実習時間外の生活指導が必要であった	12.5
一部のテクニックにしか興味を示さなかった	6.3
その他	6.3
無回答	9.4

表16　学生の問題点に対して取った解決手段（複数回答）　$n=32$

学生と，やんわりと話し合った	71.9%
ＯＴ部内あるいはリハスタッフ全体で集団討議をした	62.5
経験をもとに，一人で指導した	37.5
北大の教官に連絡・相談した	31.3
学生本人の成長を待った	31.3
学生に，厳しく指摘した	28.1
同業の友人等に相談した	18.8
本や雑誌等を参考にした	18.8
北大の文書「臨床実習」「指導報告書」を参考にした	12.5
長期講習会で学んだことを参考にした	6.3
スーパーバイザー会議で話しあいたい	6.3
その他	3.1
無回答	3.1

指摘（28.1%），同業の友人に相談（18.8%），本や雑誌を参考にした（18.8%）であった。

学生に不足していた知識については（表17），専門的基礎科目では解剖学（34.4%），運動学（31.3%），精神医学(31.3%)，臨床心理学(25.9%)，生理学（21.9%），神経学（18.8%），人間発達学（15.6%）等であった。また作業療法専門科目では評価法(50.0%)，精神障害作業療法（40.6%），作業療法概論（21.9%），技術学（18.8%），発達障害（18.8%），身体障害（15.6%)等であり，全体として学生の感じた知識の不足程度よりは少なかったと言える。

3）指導上の困難等について

指導上の困難に関しては(表18)，その筆頭に自らの業務に忙しくて指導に割く時間の不十分さ（68.8%）が上げられ，次に，評価基準の不明確さ（34.4%），学生の消極的態度（34.4%），そして指導方法へのとまどい（28.1%）等が上げられていた。

実習指導そのものに対しては(表19)，多くが後輩を育てる役目(65.6%)，教えることが楽しく勉強になる（34.4%）等の積極的肯定的に受け止めている一方，現実的には負担であり(53.1%)，自分自身の勉強もしたい（53.1%）という傾向も少くなかった。

4）当学科への意見・要望（表20）

実習前の学生への心構えや文書の書き方の指導（53.1%），明確な指導目標の提示（50.0%），学生の評価様式の改善（25.0%）等，学科としての実習の準備の問題，形式的なスーパーバイザー会議(28.1%)，スーパーバイザー会議での話やすい雰囲気(18.8%)，実習に関する講習会等の開催（18.8%），教官の関わりの増大（15.6%)等の臨床実習指導者と学科との共同作業の必要性，そして現場の指導者自身の苦労の認識の要請（18.8%）がみられていた。なお今回初めての6週間の実習期間については43.8%が短すぎたと，学生とほぼ同率の回答であった。

IV. 考　　察

考察にあたり，前記結果の基本的な分析視角の第一は，臨床実習の当事者である学生が抱える以下の問題点の検討である。即ち，①知識・技術の学習・習得状況に関連する点，②実習指導に関する点，③実習前の学力形成をはじめ当学科の課題，④現行のわが国における作業療法臨床実習の問題点，である。

第二の分析視角は，臨床実習の当事者であり，現代という社会的・時代的背景をもつ学生の発達課題への注目である[4]。即ち，個々の学生の人

表17　学生に不足していた知識は何か（複数回答）　$n=32$

{一般教育}	
心理学	15.6%
英語	9.4
教育学	9.4
生物学	6.3
ドイツ語	3.1
その他	3.1
保健体育	3.1
{専門基礎}	
解剖学	34.4%
運動学	31.3
精神医学	31.3
臨床心理学	25.0
生理学	21.9
神経学	18.8
人間発達学	15.6
リハ医学	9.4
病理学	6.3
リハ概論	6.3
一般臨床医学	6.3
内科学	6.3
整形外科学	6.3
小児科学	6.3
医学概論	6.3
生体計測工学	6.3
情報処理工学	6.3
その他	6.3
{専門}	
評価法	50.0%
精神障害ＯＴ	40.6
ＯＴ概論	21.9
技術学	18.8
発達障害ＯＴ	18.8
身体障害ＯＴ	15.6
老年障害ＯＴ	9.4
障害機能代償法	9.4
職能適性管理学	9.4
その他	15.6

表18　指導者自身の指導上の困難は（複数回答）　$n=32$

仕事が忙しく，指導に充分に力を入れることができなかった	68.8%
学生の評価基準が明確でなかった	34.4
学生が，実習に消極的なので，苦労した	34.4
どう教育したらいいかわからず，戸惑った	28.1
学生の性格・学業成績等の情報が無いため困った	18.8
学生にどの程度，患者をまかせてよいのかわからなかった	15.6
実習指導によって，自分の生活に支障があった	15.6
実習指導の方法について気軽に相談や討議出来る場がなかった	9.4
実習指導に熱意が湧かず辛かった	6.3
スタッフ間の協力が得られず困った	6.3
その他	12.5

表19　実習指導者自身について（複数回答）　$n=32$

後輩を育てることが先輩の役目だ	65.6%
正直なところ，負担である	53.1
自分自身ももっと勉強したい	53.1
学生に教えることが楽しく，自分の勉強になる	34.4
学生には，自分らを乗り越え作業療法を発展させて欲しい	28.1
楽ではないが，誇りを持っている	18.8
仕事の一環としてやっているだけ	9.4
特別にどうとも思っていない	3.1
その他	6.3

表20　北大作業療法学科と教官への意見・要望（複数回答）　$n=32$

実習に出る前に，学生に心構えや文書の書き方を教えて欲しい	53.1%
指導目標を明確に示して欲しい	50.0
実習期間が短すぎた，長くして欲しい	43.8
スーパーバイザー会議は形式的すぎる	28.1
学生の評価様式は実際的でないので，改めて欲しい	25.0
スーパーバイザー会議では，話し易い雰囲気が必要だ	18.8
実習指導者の現場の苦労を知って欲しい	18.8
実習に関する講習会等の機会を持って欲しい	18.8
教官ももっと実習に関わるべきだ	15.6
指導謝金が少ない	9.4
連絡しずらい	9.4
教官の施設訪問の回数を増やして欲しい	6.3
その他	3.1

格形成におよぼす臨床実習の意義と影響という問題であるが，これは，従来あまり論じられてきたとは言えない問題である。

1．学生の抱えていた問題点

1）知識・技術の学習・習得上の問題

今回の調査から，学生は基本的に臨床実習の前後とその期間を通じての諸困難を受け止めながら，学習・習得に励んでいたことが明らかとなった。

学生にとって第1の困難は，作業療法における検査と評価から治療計画作成，治療援助，記録と報告までの臨床実習の過程に関わる課題の達成であったが，その中でも評価や問題点の把握など初期の課題に集中していた。それは知識の全般的な不足はもちろんであるが，直接には実際の患者を前にしての知識の応用や統合があらためて問われたことによるものである。このような状況に対し，知識を補いつつ応用に習熟するための努力を重ねていたが，それは自分での勉強や同級生や他の実習生への相談が主であり，学生自身や実習指導者の意見にも示されているように，実習指導者との質問のやり取りや討論を通じて理解を深めていくという積極的能動的な姿勢には乏しい状態で実習を行っていたとみることができよう。この点は，「わからないことをどう解決したら良いかわからない」という問題とも関連するものである。一方，指導者からみて，学生の知識不足はそれほど大きな問題とはなっておらず，ある意味では当然とみなされており，両者の意識には大きなギャップが存在していた。

学生にとっての第2の困難は，指導者や患者との関係の問題であった。この面での困難は学生にとっては非常に深刻な問題となる[5]。学習課題に関する困難は指導者や学科教官に相談することで解決は可能であるが，指導者等との問題は同級生と相談したり，“泣きながら”我慢することで実習期間が終えるのを待つことが現実には多いものと思われる。この点は，次項とも関連することであるが，実習指導者の抱えた困難の中でも学生の消極性や課題を期限までに提出しないこと，熱意の無さなどの問題があり，それに実習指導者がどの様に対応すべきか戸惑い，苦労し，悩んでいたことと深く関わっていた。そして，学生と話しあい，スタッフ間で相談討議を行い，学科の教官と相談することによって解決をはかろうとしたり，学生自身の成長を待つなどの配慮がなされていた。

この様に，学生にとっての主な困難と指導者側からみた学生の問題とはその性格が大きく異なっていたことが明らかとなった。これは学内での教育と臨床実習との分離という現状の問題によるものであるが，当面はこの様な相違をどの様に少なくすることが出来るかが今後の課題である。

2）実習指導に関連する問題

前項で検討した様に，学生にとっては自分の知識・技術の問題と，指導方法も含めて指導者との関係が実習における困難の主要な要素となっていたが，実習指導者にとっては指導のあり方が学生の知識面の問題以上に大きな困難となっていた。学生は，少なくない実習指導者を近寄り難い，恐ろしい，話しづらいと感じており，その結果，話しやすい雰囲気や指導者の体験を語って欲しい，懇切丁寧な指導などを要望していた。

一方，実習指導者においては，学生に対しては厳しいよりはやんわりと話すなどの配慮をしながら指導しているが，これらの努力は学生には必ずしも十分に受け入れられてはいないことは，実習指導者が多忙な業務と指導の両方を行わざるを得ない過重な負担の状況にあり，また指導経験が浅い実習指導者が多いために，学生の困難に充分に対処しきれていないという状況もその背景には存在している。このため，多くの実習指導者は，同僚に相談したり，勉強しながら指導の方法の改善を模索しており，この面

での勉強への強い志向を示していた。

このように，現在の臨床実習は学生と実習指導者の種々の悩みの上に成立していると言えよう。こうした状況をいかに打開していくかは臨床実習を委託する側である当学科にとって大きな課題となるものである。

3）当学科に由来する問題点

この年度の学生においては，4月早々の実習開始のため，心構えの十分な指導と評価の具体的な復習に欠けており，これが学生の臨床実習への不安と過緊張を強める大きな要因となっていた。また，実習での到達目標を大部分の学生が理解していないという点に関しては，実習前に，臨床実習を行うことの意義，さらには各領域ごとの実習で何を学ぶべきなのかという点についての具体的で突っ込んだ説明論議が不十分なまま，スケジュール的に臨床実習が開始されている現状を反映している。このことは実習指導者の当学科に対する意見や要望にも反映されている。従来，わが国の作業療法の臨床実習は実習指導者に全てを委ねる方式で行われてきたため，当学科における臨床実習もそのような傾向にあったことは否定しがたい事実であるが，今回の調査では実習指導者側もこの点での改善を求めている様に思われた。すなわち，学生の指導目標をより具体的に明確化し，学生の評価様式を再検討し，臨床実習に関する会議の運営方法の改善，実習指導方法等の学習機会の提供，さらには各分野ごとの臨床実習に関する実習指導者との共同研究の推進など，当学科の臨床実習への指導性と努力が強く求められていると言って過言ではない。こうしてこそ，実習指導者も自らの指導方法を改善しつつ勉強することが出来るものと思われる。

次に，重要なこととして実習前までの学内での講義・演習・実習などのカリキュラムが体系的に組み立てられているかという問題が存在する。この点は，新カリキュラムへの移行まもない現状の制約もあり，決して十分な状況にはない[6]。3年次の臨床実習は，約2年間の知識・技術を学生内部で統合させる目標で実施されるものである。したがって，それまでの教育カリキュラムにおいても系統性が要求されるが，現時点では特に専門科目において未だ不十分であり，個々バラバラに相互の連関が不十分な状態にある可能性が大きいと言えよう。この様な状況下にあることも学生が臨床実習の場において学生が知識・技術の不足を強く感ずる大きな要因と考えられる。　以上，当学科としては学生ならびに実習指導者の抱える困難と問題を解決する上で大きな責任を有しているということができる。

4）臨床実習の制度的問題点

現行の臨床実習における多くの問題の背景には，その解決を個々の学生や実習指導者，そして学校とその教員に委ねるだけではすまされない，作業療法教育の制度的不備が横たわっていることも事実である。それは医育機関としての役割を果たすべき大学附属病院の極端な不備に象徴される養成施設における教育と臨床実習の分離の問題，さらには実習施設の少なさと実習指導者の身分的教育的保障の貧困，卒後教育・生涯教育制度の不備など山積しており，その抜本的な改善は大きな課題となっている[7)8)]。

しかし，わが国における作業療法の歴史はまだ浅く，4年生大学も発足したばかりであり教育制度自体が過渡的な状況におかれているため，長期的な展望のもとで作業療法士自身による主体的な努力の積み重ねこそが最も強く求められているものと思われる。

2．学生の人格形成上での課題

今回の調査からは，臨床実習そのものの成否に対する感想とは別に，大部分の学生が自身の成長・発達をある程度自覚し，今後の自分の将来に対して積極的な姿勢を示していることを知ることができた。このことは，これら学生が卒業した後は全員，作業療法士として働いている

ことからも明らかであり，臨床実習は学生の人格形成上で大きな意義を持つものとなっている。

臨床実習は，基本的には学生がそれまでの作業療法に関する教育が一定の到達水準に達したから実施されるものである。しかし，この臨床実習の過程は病院等という実社会の場で種々の問題を内包する患者と接するまさしく総合的な過程であり，学生のそれまでの教育で得た知識や技術はもちろん，これまでに形成されてきた人格のすべての側面が試される過程でもある。したがって臨床実習において学生が知識・技術を統合化することはもちろん，職業人としての自己を形成し，成長・発達することが出来るか否かは，作業療法教育の根底的な問題である。

それまで親の庇護と学内の懐で学んでいた学生が，一人で一般の医療機関である実習施設に出向き，初対面の実習指導者の指導のもとで多くの他の職員とも何等かの関わりを持ちながら，病者・障害者である患者と接することは，ある意味では複雑な人間関係の渦中に入り込むことであり，そのことによるストレスは極めて大きなものである。とりわけ，現代の学生は偏差値による輪切り教育によって人間関係が次第に希薄になりつつある小中高の学校生活の中で生き抜いて来る。この様な過程で育った学生の人格上での歪みは，臨床実習の様な総合性を要求される場では極めて明瞭な形で現れることになる。この様な人格的問題を有する学生への対応は従来，ほとんどが個々の実習指導者による個別的な対応でなされており指導方法については養成校と実習指導者が全体で検討する機会は決して十分とは言えない[9]。

実習指導者の多くは，実習を通じて意識的あるいは無意識的を問わず，このような人格面での問題を有する学生に注意を払い，その発達のために尽力しているのが現状である。中には，勤務外の多くの時間と少なからぬ経済的負担を費やして援助を続けてくれる指導者も決して少なくない。一方，経験年数の少ない若い指導者の中には，業務の忙しさと責任の重さもあって，高い要求水準の下で，学生の状態を十分把握できずに性急な指導を行い，結果として打撃的対応となる場合も決して少なくない。これは学生が精神的に落ち込んだり，自己の作業療法士としての適性に自信を失い，ある場合は途中で実習を放棄する要因とさえなる[5]。

作業療法士の養成においては，学生の人格的発達を促す課題は，知識・技術の学習・習得上の課題とは別個の側面を有する反面，同時に深く関係しあっている。すなわち，これは教育年限内における学生自身の成長・発達の問題であると共に，他方では作業療法士の養成という教育全般の問題である。したがって学生の諸問題が顕著な形で現れる臨床実習に関しても，当学科としても実習指導者においても，より意識的な関わりとそのための研究が今後の重要な課題である[10]。

V．結　　論

学生と実習指導者からのアンケート調査の結果をもとに，臨床実習に関わる問題点とその解決の基本的な方向を検討した。

その結果，臨床実習は学生の成長を大きく促進し，職業的自己を確立させる原動力となっている点で，作業療法士養成の土台としての位置を占めるものである。しかし，現実には学生と実習指導者の双方に多くの困難を強いる結果となっていることが明らかにされた。この背景には，わが国における作業療法士養成の歴史が浅く，臨床実習の体制も十分に確立されたものにはなっていない現状も深く関連している。

同時に，当学科としてはこれらの臨床実習の過程で生じた課題の具体的な解決に向けて，個別的事例の検討を積み重ねながら臨床実習の指導方法の改善に取り組むことが必要である。さらに，改善可能な諸点に関しては早急な対応も必要である。具体的には 1993 年度の臨床実習の

開始時期を5月中旬と遅らせ，実習期間も延長したこと等がその現れであるが，それらも含めて臨床実習の改善には今後も息の長い研究が必要である。

学生の成長発達は決して平坦な道のりではないが，この臨床実習の過程が学生はもとより指導にあたる多くの作業療法士にとっても大きな成長の場であり，喜びの場となることを強く念願するものである。

謝辞

本研究に協力していただいた本学科10期生と実習指導者の皆さんに深く御礼申し上げます。

引用文献

1）日本作業療法士協会教育部：臨床実習指導，作業療法，2(2)，98－105，1983.
2）(社) 日本作業療法士協会教育部：臨床教育に関するアンケート調査報告，作業療法，5(3)，71－79，1986.
3）浅井千春他：ＯＴ教育を受けてみて，ＯＴジャーナル，23(9)，652－658，1989.
4）小川太郎：教育と陶冶の理論，11－36，1970. 明治図書.
5）中島彩，森林史代：臨床実習において作業療法学生が直面した種々のトラブルと問題解決に関する調査研究，北海道大学医療技術短期大学部作業療法学科卒業研究論文集(5)，64－74，1991.
6）山口鞆音：臨床実習はどうあるべきか，ＯＴジャーナル，24(5)，327－333，1990.
7）(社)日本作業療法士協会教育部：四年生大学における作業療法教育のカリキュラム，作業療法，11(2)，191－201，1992.
8）矢谷令子：作業療法における専門性と総合性，ＯＴジャーナル，26(4)，226－232. 1992.
9）早川俊秀他：私のスーパーバイザー論，ＯＴジャーナル，24(5)，334－345，1990.
10）堀尾輝久：人間形成と教育，225－255，1991. 岩波書店.

資料１　臨床実習に関する調査（学生用）　　1993.2.

Ⅰ．あなたご自身について
１．性別　（男・女）　　２．年齢（実習時）　＿＿＿＿才
Ⅱ．実習の全体について
１．初めて実習に行く直前はいかがでしたか。当てはまるものに○をつけて下さい。いくつでも。　9.を選択した方は（　）内にも記入して下さい。
　1.　とても緊張していた、　2.　不安だった、　3.　楽しみだった
　4.　勉強をした、　5.　実習に関する情報を得た、　6.　同級生と話した
　7.　遊んでいた、　8.　普段と変わらなかった、　9.　その他（　　）
２．実習の期毎の分野は何でしたか。小児・身障・精神・老人の別に記入して下さい。なお、身障と老人など重複する場合はすべて記入して下さい。
　１期（　　）、　２期（　　）、　３期（　　）
３．終了した現在、実習を振り返ってみてどうでしたか。次の内から一つのみに○をつけて下さい。　5.を選択した方のみ（　）内にも記入して下さい。
　1.　３期ともうまくいった　　2.　３期ともだめだった
　3.　一部はうまくいったが、他はだめだった
　　だめだったのは、（１期、２期、３期）だった
　4.　なんとも言えない　　5.　その他（　　）
４．実習過程中、困難であったのはどの過程ですか。当てはまるものには、いくつでも○をつけて下さい。またその期についても○をつけて下さい、いくつでも。
　1.　検査と評価　　（１期、２期、３期）
　2.　問題点の把握　　（１期、２期、３期）
　3.　治療計画の作成　　（１期、２期、３期）
　4.　治療・援助の実施　　（１期、２期、３期）
　5.　記録と報告　　（１期、２期、３期）
　6.　職業人のマナーなどの適性　　（１期、２期、３期）
　7.　管理・運営に関わること　　（１期、２期、３期）
　8.　実習セミナーの報告・発表　　（１期、２期、３期）
　9.　実習以外の事（　　）　　（１期、２期、３期）
　10.　その他（　　）　　（１期、２期、３期）
Ⅲ．臨床実習中、体験した問題について
１．基本的な知識が不足していたと思いましたか。　当てはまるものにひとつだけ○を付けて下さい
　1.　思った、　2.　思わなかった、　3.　わからない、
１－１．1.と答えた人にのみお聞きします。それは次のどの分野の知識ですか。当てはまる科目にいくつでも○を付けて下さい
　{一般教育}　1.心理学、2.教育学、3.生物学、4.その他（　　）
　{外国語}　1.英語、2.ドイツ語　{保健体育}　1.保健体育
　{専門基礎}
　1.解剖学、2.生理学、3.運動学、4.病理学、5.臨床心理学、6.リハ概論、
　7.リハ医学、8.一般臨床医学、9.内科学、10.整形外科学、11.神経学、
　12.精神医学、13.小児科学、14.人間発達学、15.医学概論、16.生体計測工学、
　17.情報処理工学、18.その他（　　）
　{専門}
　1.ＯＴ概論、2.技術学、3.評価法、4.身体障害ＯＴ、5.精神障害ＯＴ、
　6.発達障害ＯＴ、7.老年障害ＯＴ、8.障害機能代償法、9.職能適性管理学、
　10.その他（　　）

１－２．知識をどのように補いましたか。次の内、ひとつだけ○をつけて下さい
　1.必死に勉強した、2.少し勉強した、3.何もしなかった、4.その他（　　）
２．自分の実習の取り組みの姿勢はどうでしたか。次の内、ひとつだけ○をつけて下さい。（実習の出来不出来は別にして考えて下さい）
　1.一生懸命に取り組んだ、　2.いいかげんであった、　3.無我夢中だった、
　4.わからない、　5.その他（　　）
３．実習中、困難だった点を次の中から選んで○をつけて下さい。いくつでも
　1.指導者との人間関係をうまく作れなかった、
　2.患者等の対象者との人間関係をうまく作れなかった、
　3.指導者の指導が理解するのが難しかった、
　4.マナーなどの一般的常識を知らず、苦労した、
　5.作業療法士になる適性に悩んだ、
　6.わからないことを、どう解決したらいいか分からなかった、
　7.提出物、報告書等の期限を守れなかった、
　8.質問や発言が出来なかった、
　9.課題をこなすだけで精一杯で、余裕がなかった、
　10.個人的な問題で、実習に身が入らなかった、
　11.実習期間が、６週間は短かった、
　12.その他（　　）
４．困難にぶつかった場合、どの様な解決方法をとりましたか。次の中から選んで、○を付けて下さい。いくつでも
　1.自分だけで努力した、
　2.実習指導者にアドバイスに依った、
　3.他の実習生に助けて貰った、
　4.短大の教官に相談した、
　5.同級生に相談した、
　6.本や雑誌を参考にした、
　7.流れに身をまかせた、
　8.ストレス解消に努めた、
　9.泣いた、
　10.その他（　　）
Ⅳ．実習指導者について
１．指導者をどう思いましたか。次のあてはまる項目に○を付けて下さい。いくつでも。（一般的印象で考えてみて）
　1.立派な方だった、　2.厳しかった、　3.優しかった、　4.近寄りがたかった、
　5.仕事が忙しそうだった、　6.尊敬できる人だった、　7.話しやすかった、
　8.恐ろしかった、　9.その他（　　）
２．指導者に対する要望がありましたら、次のあてはまる項目に○を付けて下さい。いくつでも
　1.懇切丁寧に指導して欲しかった、
　2.ビシビシ指導して欲しかった、
　3.話しやすい雰囲気を作って欲しかった、
　4.実習の日程などの計画を明示して欲しかった、
　5.指導内容が理解できるようにして欲しかった、
　6.指導の時間を多くして欲しかった、
　7.課題を減らして欲しかった、
　8.指導者の経歴や人となりを事前に知りたかった、
　9.症例数を多くして欲しかった、

10.指導者の体験などを聞きたかった、
11.特に無い
12.その他（　　）

Ⅴ．医短の教官側について

1．実習期間（６週間）について、どうでしたか。次のうちひとつに○を付けて下さい。
1.長かった、　2.短かった、　3.ちょうど良かった、　4.わからない

2．実習到達目標について、どうでしたか。次のうちひとつに○を付けて下さい。
1.明確でなかった、2.明確だった、3.わからなかった、4.その他（　　）

3．教官の訪問について、どうでしたか。次のうちいくつでも○を付けて下さい。
1.うれしかった、2.いやだった、3.もっと多く訪問して欲しかった、
4.必要なかった、5.その他（　　）

4．実習の前について、どうでしたか。次のうちいくつでも○を付けて下さい。
1.心構えをする期間が欲しかった、　2.評価などの復習をして欲しかった、
3.特に期待することは無かった、　4.その他（　　）

Ⅵ．実習を終えた現在について

1．実習に行く前と終了後では変化がありましたか。次のうちいくつでも○を付けて下さい。
1.知識が増えた、　2.作業療法がわかってきた、　3.人間的に成長した、
4.自信がついた、　5.自信をなくした、　6.もっと勉強したいと思った、
7.変化なかった、　8.その他（　　）

2．さいごに、臨床実習についてのご意見、ご要望を自由に書いて下さい

資料２　臨床実習に関する調査（指導者用）　1993.2.

Ⅰ．先生あるいは貴施設について

1．年齢について、当てはまる項目に○を付けて下さい
1.２１～２４才、　2.２５～３０才、　3.３１～４０才、　4.４１～５０才、
5.５１～６０才、　6.６１才以上

2．性別について、当てはまる項目に○を付けて下さい
1.女性、　2.男性

3．作業療法士免許取得後何年経ちますか。当てはまる項目に○を付けて下さい
1.１～３年、2.４～６年、3.７～１０年、4.１１～２０年、5.２１年以上

4．作業療法の臨床経験は何年経ちますか。当てはまる項目に○を付けて下さい
1.１～３年、2.４～６年、3.７～１０年、4.１１～２０年、5.２１年以上

5．臨床実習指導の経験は何年経ちますか。当てはまる項目に○を付けて下さい
1.１～３年、2.４～６年、3.７～１０年、4.１１～２０年、5.２１年以上

6．実習指導の領域は次のどれですか。当てはまる項目に○を付けて下さい。
ふたつ以上に該当する場合、すべてに○を付けて下さい
1.身体障害、2.精神障害、3.発達障害、4.老年障害、5.その他（　　）

7．貴施設では今年度(92.4.～93.1)、合計何名の実習生を受け入れましたか。当てはまる項目に○を付けて下さい
1.１名、　2.２～３名、　3.４～６名、　4.７から１０名、　5.１１名以上

8．その中で、先生ご自身は何名を指導担当されましたか。当てはまる項目に○を付けて下さい
1.１名、　2.２～３名、　3.４～６名、　4.７から１０名、　5.１１名以上

9．貴施設では、先生も含め、作業療法士は全員で何名ですか。当てはまる項目に○を付けて下さい
1.１名、　2.２名、　3.３名、　4.４名、　5.５名、　6.６名以上

１０．貴施設では、ＯＴ以外のリハビリテーションに関わるスタッフは全員で何名ですか。当てはまる項目に○を付けて下さい
1.１名、　2.２～３名、　3.４～６名、　4.７から１０名、　5.１１名以上

１１．貴施設では、全体として、臨床実習に対して協力的ですか。当てはまる項目に○を付けて下さい
1.協力的である、2.協力的とは言えない、3.どちらでもない、4.その他（　　）

１２．先生は、臨床実習に関する何等かのマニュアルを使っていますか。当てはまる項目に○を付けて下さい
1.使用している、2.使用してない、3.作成の予定あり、4.その他（　　）

Ⅱ．実習学生について（指導した学生全体の傾向としてお答え下さい）

1．学生に観られた問題点について教えて下さい。当てはまるものにいくつでも○を付けて下さい
1.作業療法の基本的知識が不足していた、
2.一般常識的なマナーに欠けていた、
3.将来、作業療法士に成るには、本人の適性に疑問を感じた、
4.指導したことをよく理解していなかった、
5.実習に熱意が感じられなかった、
6.場に即応した言動が観られなかった、
7.スタッフとの人間関係をうまく作れていなかった、
8.患者・対象者との人間関係をうまく作れていなかった、
9.質問・発言が少なかった、

10.提出物・報告書等の期限を守らなかった、
11.与えた課題以外、しようとはしなかった、
12.一部のテクニックにしか興味を示さなかった、
13.時間を無駄に過ごしていた、
14.実習時間外の生活指導が必要であった、
15.つかみどころが無かった、
16.その他（　　）

2．学生の問題点に関して、次のどのような解決手段をとられましたか。当てはまるものにいくつでも○を付けて下さい
1.経験をもとに、一人で指導した、
2.ＯＴ部内あるいはリハスタッフ全体で集団討議をした、
3.北大からの文書「臨床実習について」「実習生指導報告書」を参考にした、
4.北大の教官に連絡・相談した、
5.同業の友人等に相談した、
6.長期講習会で学んだことを参考にした、
7.本や雑誌等を参考にした、
8.スーパーバイザー会議で話しあいたい、
9.学生本人の成長を待った、
10.学生に、厳しく指摘した、
11.学生と、やんわりと話し合った、
12.その他（　　）

3．学生の不足していた知識で、もっと勉強して欲しいと思われる科目を教えて下さい。当てはまるものにいくつでも○を付けて下さい
{一般教育}　1.心理学、2.教育学、3.生物学、4.その他（　　）
{外国語}　1.英語、2.ドイツ語　{保健体育}　1.保健体育
{専門基礎}
1.解剖学、2.生理学、3.運動学、4.病理学、5.臨床心理学、6.リハ概論、
7.リハ医学、8.一般臨床医学、9.内科学、10.整形外科学、11.神経学、
12.精神医学、13.小児科学、14.人間発達学、15.医学概論、16.生体計測工学、
17.情報処理工学、18.その他（　　）
{専門}
1.ＯＴ概論、2.技術学、3.評価法、4.身体障害ＯＴ、5.精神障害ＯＴ、
6.発達障害ＯＴ、7.老年障害ＯＴ、8.障害機能代償法、9.職能適性管理学、
10.その他（　　）

Ⅲ．指導上について
1．学生の実習指導上、先生が困難だったと思われる点について教えて下さい。当てはまるものにいくつでも○を付けて下さい
1.学生の性格・学業成績等の情報が無いため困った、
2.実習指導に熱意が湧かず辛かった、
3.どう教育したらいいかわからず、戸惑った、
4.スタッフ間の協力が得られず困った、
5.学生の評価基準が明確でなかった、
6.仕事が忙しく、指導に充分に力を入れることができなかった、
7.学生にどの程度、患者をまかせてよいのかわからなかった
8.学生が、実習に消極的なので、苦労した、
9.実習指導の方法について気軽に相談や討議出来る場がなかった、
10.実習指導によって、自分の生活に支障があった、
11.その他（　　）

2．実習指導者として、先生はどう思っていますか。当てはまるものにいくつでも○を付けて下さい
1.楽ではないが、誇りを持っている、
2.学生に教えることが楽しく、自分の勉強になる、
3.仕事の一環としてやっているだけ、
4.後輩を育てることが先輩の役目だ、
5.正直なところ、負担である、
6.自分自身ももっと勉強したい、
7.学生には、自分らを乗り越えて、作業療法を発展させて欲しい、
8.特別にどうとも思っていない、
9.その他（　　）

Ⅳ．北大ＯＴ学科について
1．北大ＯＴ学科と教官へのご意見・ご要望を教えて下さい。当てはまるものにいくつでも○を付けて下さい
1.指導目標を明確に示して欲しい、
2.学生の評価様式は実際的でないので、改めて欲しい、
3.実習期間が短すぎた、長くして欲しい、
4.教官の施設訪問の回数を増やして欲しい、
5.実習に出る前に、学生に心構えや文書の書き方を教えて欲しい、
6.教官ももっと実習に関わるべきだ、
7.連絡しずらい、
8.スーパーバイザー会議は形式的すぎる、
9.スーパーバイザー会議では、話し易い雰囲気が必要だ、
10.指導謝金が少ない、
11.実習指導者の現場の苦労を知って欲しい、
12.実習に関する講習会等の機会を持って欲しい、
13.その他（　　）

Ⅴ．さいごに
1．臨床実習のあり方についてなど、どのようなことに関してでも、ぜひ、ご意見、ご批判、ご要望等をご記入下さい